

## 「チュラローンコーン大学サマースクール派遣参加報告書」

京都大学法学部・4年 (冨上 恵里)

チュラローンコーン大学での2週間のサマースクールでは、タイ語の授業やタイの歴史や社会についての講義、日本語学科の学生との共同発表、アユタヤや寺院・王宮の見学があった。共同発表ではタイと日本の祭りを調べ、両国の精神性や歴史を比較した。私たちの班はタイのヘーティアンパンサーと日本の高野山のろうそく祭りを比較した。

プログラムを通じて私が印象に残っているのは2つある。

一つ目は、調べ始めた当初に「高野山のろうそく祭りに使われるろうそくの原料は何？」というタイの学生の質問に対する私の思いである。「ろうそくの原料はろうに決まっているし、祭りに何のろうそくを使うかなんて関係ないでしょ。」と、質問の意味も何も分かっていないのに固定概念で決めつけた自分の凝り固まった考え方である。後々話をよく聞いてみるとタイの祭りはろうそくで作った山車の華やかさを競うもので原料が大事になってくるらしい。この背景でなされた「ろうそくの原料は何」という質問は確かにタイの人にとってはとても重要な質問である。固定観念で決めつけた自分の過ちに気づかされると同時に、どのような人との対話でも同じだが質問の意図を正しく読み取ること、相手の背景が自分の常識とは全く異なっていることを痛感した。

二つ目は、タイのチュラローンコーン大学での和歌山県の認知度である。地元から京都に来て四年間京都で過ごし、私にとって和歌山の魅力はいや増したが残念ながら日本の中で和歌山の認知度は大きくない。しかし、タイでは違った。タイで出身県を聞かれ和歌山なんてどうせ知られていないだろうし大阪って答えようかなとも思いつつも「和歌山出身」と答えると「猫、たま駅長！行ったことある！」と予想外の反応をくれた。私が中学生のころ友達と猫を見に貴志川線に乗るとそこには、「路線継続のために和歌山県民は一年に五回乗って貴志川線を存続させよう」と少し悲しいポスターが貼られてあった、駅である。現在日本では地域創生が掲げられ観光誘致や地域の魅力再発見が行われている。テレビでも「意外なところが外国人に大人気」と題うち、見知らぬ観光地が紹介されていることがある。しかし、私はこのプログラムを通しタイの人の考え方に触れることで、観光地が人気になるのは意外ではなく何か理由があると感じた。日本らしさを求められる場合は確かに日本人や地元が誇りに思うことや精神を示し迎えればよいと思う。しかし、観光客を誘致しようとする際に自らが伝えたいことの他に相手が何を求めているかを深く知る必要があり、この観点を観光にも組み入れられればもっと誘致できるのではないだろうか。そのためにはよりそれぞれの国の観光客の価値観や歴史を知り触れる必要があると思う。それは旅行するだけでは得られない、もっと深い部分で感じる必要があると考えた。タイで2週間過ごし、一端を垣間見ることができたが、まだまだ私が学び考えることは沢山あると感じている。この視点こそが観光客を呼び込む上で必要になってくるのではないかとおもう。そして、ある国の人柄や文化を知ること、その視点をもって日本を見てみると新たな日本や地域の魅力を再発見することにつながるのではないだろうか。

タイはよく、微笑みの国や日本と同じ仏教の国であると言われ日本からの観光客にもものすごく人気の国である。でもこのプログラムを通して私は違う思いを抱くようになった。微笑みに込められた思いは日本の微笑みよりもっと深いものである場合もあるし、同じ仏教国だからといっても全く日本とは異なる。タイの人と話したりするととても気持ちが穏やかになるし街には刺激があふれている。留学中に話題になった「ウルトラマンブッダ」のように日本人にとってはあまり問題にならなくてもタイの人からすると大問題になる。日本とタイは似ているかもしれないが実はものすごく異なっている。でも「ไมเป็นไร」があふれる国、タイは私にとってもものすごく好きな国となった。旅行ではなく現地の学生とともに生活を行いタイの深さを垣間見ることができた。タイの政治体制や国家の在り方に囚わらずも直に触れる機会もあり、自分にとってとても貴重な体験となりました。これからもタイについて文化の相違点をもっと勉強したい、もっとタイの人やタイを知りたいと思うようになりました。現地で私たちをサポートしてくれたタイの学生や先生、多くの人にあってよかったです。